

■ PCN だより

PCN Volume 62, Number 5 の紹介 (その1)

2008年10月発行のPCN Vol. 62, No. 5には Regular Article が18本, Short Communication 1本, Letter to the Editor 6本が掲載されている。この中から外国からの Regular Article 9本の内容を紹介する。

Regular Article

1. Neuropsychological impairment and gender differences in HIV-1 infection

J. M. Failde-Garrido, M. Rodríguez-Alvarez and M. G. Simón-López

HIV-1 感染者の神経心理学検査における性差

AIDS 患者では、前頭葉における神経細胞脱落、脳質周囲・脳梁・内包・前交連・視神経の白質における脱髄が認められ、前頭葉・皮質下機能の障害が報告されてきた。AIDS は男性の同性愛者に多いこともあり、これまで HIV 感染者の神経心理学的検討は、主として男性においてであり、女性についての報告はなかった。

本報告では、HIV 感染者を、HIV+男性 (57名)、HIV+女性 (31名)、HIV-男性 (18名)、HIV-女性 (16名) の四群に分けて神経心理学検査について比較検討した。HIV 陽性群では、男性の 51.9% に、女性の 54.8% に神経心理学的異常が認められた。HIV+男性では視覚記憶、注意、精神運動速度、抽象能力により強い障害が認められ、HIV+女性では、注意、精神運動速度、言語記憶においてより強い障害が認められた。これらの結果から HIV 感染による脳機能障害には性差があることが示唆された。

2. Exploring the burden of the primary family caregivers of schizophrenia patients in Taiwan
S-Y. Hou, C-L. K. Ke, Y-C. Su, F-W. Lung and C-J. Huang

台湾における統合失調症患者を介護する家族の負担についての調査

【目的】統合失調症患者の介護にかかわる家族の負担と家族の負担に影響を与える因子について解析する。【方法】総合病院の急性期病棟とデイケアにおいて統合失調症患者と家族の126組について背景、BPRSによる患者の症状評価、Caregiver Burden Inventory-Brief Versionによる家族の負担、Chinese Health Questionnaireによる介護者の健康状態を評価した。【結果】介護者の負担は中程度(平均25.9点)であった。介護負担の5項目のうち、介護者の不安が最高であり、患者の依存、罪と恥の気持ち、家族への干渉の順序であり、スティグマの負担は最低であった。最も大きい負担は、「患者が一人残った時に心配」「患者が病気になった時に心配」「患者が介護者に依存しすぎる」であった。介護者の負担に与える因子は、医療スタッフに対する満足度、介護者のCHQ得点、患者のBPRS得点であった。【結論】介護者の身体的、精神的な健康度は介護者の負担を決定する最も重要な因子である。統合失調症患者には、ニードを支援し、患者の症状を軽減し、家族の介護負担を軽減し、治療への家族の関与をすすめるような総合的な多面的な介護が重要である。

3. Cognitive functions in bipolar affective

disorder and schizophrenia : Comparison
B. K. Pradhan, S. Chakrabarti, R. Nehra and A. Mankotia

双極性感情障害と統合失調症の認知機能についての比較研究

【目的】これまでの多くの報告では統合失調症と双極性障害の間に共通する認知機能障害が報告されてきたが、必ずしも一致した結果にはなっていない。そこで、両疾患における認知機能障害について比較した。【方法】気分が正常化している双極性障害患者 48 名、寛解状態の統合失調症患者 32 名、健常者 23 名について、遂行機能、記憶、知能、注意、感覚運動機能を評価した。教育年数と残存する感情症状について補正した後、各群を比較した。【結果】統合失調症群、および、双極性障害群は、いずれも健常群と比較して、遂行機能、記憶、知能、感覚運動機能において有意な障害を呈していた。しかしながら、教育年数と残存する感情症状について補正した後の比較では、統合失調症群における遂行機能、統合失調症群および双極性障害群における記憶を除いた項目において有意差が消失した。統合失調症群はすべての項目において双極性障害群より成績が低下していたが、有意差はなかった。【結論】双極性障害群は、統合失調症群と比較してやや軽度ではあるが共通する認知機能障害を呈していた。双極性障害と統合失調症との間に共通する認知機能障害が存在するという事実は、両群に共通する病因ないし治療法を示唆するものである。

4. Measuring readiness to change and locus of control belief among male alcohol-dependent patients in Taiwan: Comparison of the different degrees of alcohol dependence
M-Y. Yeh

台湾の男性アルコール依存者における飲酒コントロール能力と依存脱出の準備性について——アルコール依存症の重症度による比較——

【目的】Drinking-Related Health Locus of Control scale (DRIE) による評価と依存症を脱する準備性の三要素(両価性, 認知, 行動)との関係について, アルコール依存の重症度による違いがあるかどうかを検討した。【方法】アルコール依存症男性患者 160 名について Severity Degree Alcohol Dependence Data questionnaire (SADD) の結果から, アルコール依存の程度を軽症, 中等症, 重症に区分して解析した。【結果】アルコール依存の重症度により, 飲酒に関するコントロール, 飲酒に対する両価性, 問題飲酒への認識, 依存症から脱するための準備性に有意な差異が認められた。重症のアルコール依存者では, 飲酒に関するコントロールの得点が高く, 外的要因によるコントロール, 両価性, 問題飲酒の認識が高かった。依存症が軽症なものでは行動への準備性得点が高かった。【結論】アルコール依存症への介入を計画するにあたり, 依存症の重症度と飲酒に関するコントロールに違いがあることを考慮することが重要である。

5. Childhood emotional abuse, dissociation, and suicidality among patients with drug dependency in Turkey
D. Tamar-Gurol, V. Sar, F. Karadag, C. Evren and M. Karagoz

薬物依存症における児童期の感情虐待, 解離, 自殺——トルコ, イスタンブールからの報告——

【目的】薬物依存症患者において解離性障害の頻度とその発症要因について検討した。【方法】中毒依存症センターにおける 104 名の連続症例について Dissociative Experience Scale (DES) により評価した。この評価尺度で 30 点以上の 37 名と, 10 点以下の 21 名とに区分して, Dissociative Disorders Interview Schedule (DDIS) と Structured Clinical Interview for Dissociative Disorders (SCID-D) とを比較した。【結果】SCID-D により 27 名 (26%) が解離性障害と判断された。解離性障害群は, そうでない

群と比較して年齢が若く、自殺企画の既往、児童期の感情的虐待が解離性障害の予測因子であった。薬物依存の解離性障害患者の59.3%には、物質依存より早い時期に解離性障害が出現していた。解離性障害を有する者は治療中断する傾向が強かった。【結論】薬物依存症の患者の多くに解離性障害があり、そのために治療経過に差異がみられる。若い年齢と児童期虐待の既往を考慮することは、発育期の心的外傷および解離性障害を有する青年期薬物依存患者の治療計画において重要である。

6. Comparative cognitive effects of levetiracetam and topiramate in intractable epilepsy *C-W. Huang, M-C. Pai and J-J. Tsai*

難治性てんかんに対するレベティラセタムとトピラメイトの認知機能に対する比較

【目的】抗てんかん剤は認知機能障害をもたらす。難治性てんかん患者におけるlevetiracetam (LEV) 治療とtopiramate (TPM) 治療について認知障害を評価した。【方法】難治性てんかん患者79名についてLEVとTPMによる治療を行い、Cognitive Abilities Screening Instrumentを用いて、治療開始時と一年後を評価した。【結果】40名がLEVにより、39名がTPMにより治療された。治療開始時のてんかん頻度、副作用、てんかん罹病期間には両群に差異を認めなかった。また一年後の認知機能についても両群に差異を認めなかったが、TPM群では見当識がより低下しており、近時記憶が改善していた。【結論】難治性てんかんの薬物療法において、LEVによる治療では、認知機能の障害は認められない。TPM治療においては認知機能の変化を観察することが必要である。

7. Cerebral glucose metabolism abnormalities in patients with major depressive symptoms in pre-dialytic chronic kidney disease: Statistical parametric mapping analysis of F-18-FDG

PET, a preliminary study

S. H. Song, I-J. Kim, S-J. Kim, I. S. Kwak and Y-K. Kim

透析前の慢性腎疾患に伴う大うつ病患者における脳グルコース代謝異常——F18GDG-PETを用いたSPM法による予備的解析——

【目的】透析前の慢性腎不全患者における大うつ病症状と脳グルコース代謝との関係を調べた。【方法】ステージ5の慢性腎不全患者と健常者21名のうつ症状とF18-FDG PETの成績とを比較検討した。【結果】慢性腎不全患者では脳グルコース代謝の低下が、左前頭前野(BA 9)、右前頭前野(BA 10)、右内外側前頭前野(BA 46)をはじめとした多くの領域で認められた。右眼窩前頭野(BA 11)では、慢性腎不全患者においてうつ病症状とグルコース代謝との間に逆相関が認められた。【結論】大うつ病の慢性腎不全患者の脳内各領域ではグルコース代謝の低下が認められる。

8. Effects of childhood physical abuse on depression, problem drinking and perceived poor health status in adolescents living in rural Taiwan

C-F. Yen, M-S. Yang, C-C. Chen, M-J. Yang, Y-C. Su, M-H. Wang and C-M. Lan

児童期の身体虐待が及ぼす青年期の抑うつ、問題飲酒、非健康感への影響——台湾の非都市部に居住する青年における調査——

【目的】台湾の非都市部において、児童期に受けた身体虐待が、青年期の抑うつ、問題飲酒、健康感にどのような影響を与えるかを調査した。【方法】台湾南部の高校生からランダムに抽出した青年1684名について質問紙法により調査し、児童期の虐待既往と抑うつ、問題飲酒、主観的健康感との相関を検討した。【結果】質問紙を回収した1684名の中で374名(22.2%)が児童期の身体虐待を経験していた。他の因子で補正した後、児童期の身体虐待は、青年期の抑うつ、問題飲酒、

主観的非健康感と有意に相関していた。【結論】
 児童期の身体的虐待は、青年期の抑うつ、問題飲
 酒、原因不明の身体的不健康を惹起する可能性が
 示唆されており、このような症状を呈する青年の
 治療計画に当たっては、児童虐待による影響を考
 慮することが重要である。

9. Neurotoxic and neuroprotective
 metabolites of kynurenine in patients with
 renal cell carcinoma treated with interferon- α :
 Course and relationship with psychiatric status
 A. R. Van Gool, R. Verkerk, D. Fekkes, M.
 Bannink, S. Sleijfer, W. H. J. Kruit, B. van der
 Holt, S. Scharpé, A. M. M. Eggermont, G. Stoter
 and M. W. Hengeveld

インターフェロン α で治療されている腎細胞癌
 患者における精神症状とキヌレニン代謝物の神経
 毒/神経保護作用について

インターフェロン α (IFN- α) による免疫療
 法においては、抑うつ症状など多くの精神症状が

みられる。その発現にはトリプトファン代謝経路
 の関与が想定されているが、IFN- α などのサイ
 トカインはトリプトファンからキヌレニンへの変
 換を担うインドールアミン 2,3-ジオキシゲナー
 ゼ (IDO) を誘導することにより、セロトニン欠
 乏を惹起する。さらにキヌレニンの代謝物である
 3-OH キヌレニン、キノリン酸などの神経毒性は、
 IFN- α による精神症状に関与する可能性があり、
 一方、キヌレニン酸には神経保護作用も知られて
 いる。

この報告では、IFN- α にて治療中の転移性腎
 臓癌患者 24 名について、6 カ月間にわたりキヌ
 レニン誘導体の測定を行い、神経毒性を有する代
 謝物と神経保護作用を有する代謝物の比率が、精
 神症状と相関するかどうかを検討した。精神症状
 の発現とキヌレニン代謝物のレベルとの関係につ
 いては、明確な結論を得ることはできなかった。
 INF- α による精神症状の副作用が、キヌレニン
 系の神経毒性/保護作用で理解できるかどうか
 について結論を得ることはできなかった。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)